

正論
一九七五年 五月号



書架

いま明らかにされる歴史的大証言 蔣介石秘録 I ■ 悲劇の中国大陸

いかにドラマチックな国際政治の舞台であろうとも、事態の推移や結末が共同声明や協定、条約に表現された瞬間、その生しい真実の大部分は、あたかも海面下の冰山に似たものになつてしまふ。

ましてや、半世紀にわたる激動を繰り返した中国革命のプロセスや「世界の文明国家の参加する最後の戦争……人類史上最後の戦

争」(蔣介石の戦勝放送本、書三六六「ジ」としなければならぬはずであった第二次大戦のドラマにいたっては、まだまだ史実が明らかにされたとは、到底いえないものがある。最近ようやく、アメリカでも外交文書が四

〇年代後半まで解禁され、戦後アジアの冷戦の背景や対日占領政策とくに天皇制の処置に関する問題などが明るみに出はじめているが、なんといっても、現代史のもっとも重要な一翼を担ってきた蔣介石の証言は、あらゆる意味で不可欠の史料として待望されていたのであった。

そこに出現したのが「蔣介石秘録」である。サンケイ新聞社とその四人のスタ

ッフが台北の現地で膨大な資料や公文書、極秘文書などを基に、蔣介石自身の証言をふんだんにとり入れてまとめつつある「秘録」の第一巻である。「秘録」全体は清末から現代にいたるまでを歴史的に構成するようであるが、本書には、アヘン戦争以後の清朝末期、つまり「悲劇の中国大陸」の草創の時代から日清戦争を経て列強の中国侵略にいたる時期までの中国革命の離伏期の苦難が描写されている。

だがなんといっても本書の旺巻は「序章、終戦前後」である。全部で二十一編の文章から成るこの序章は、「秘録」全体の序章でもあるが、そこには日本降伏前後の連合国側の動き、とくにこれまでに十分に明らかでなかったソ連の対日意図などが、有名な「以徳報怨」という蔣介石の対日基本方針と対照的に描

かれている一方、ヤルタ密約以後、四五年の中ソ条約をめぐるスターリンとの交渉秘史や蔣介石と毛沢東との重慶交渉前後の裏面史が息もつかせぬばかりのタッチで描かれている。ヤルタ密約の存在を知らされた蔣介石が急遽、宋子文をモスクワに派遣し、スターリンと交渉させた中ソ会談の模様もそのまま再現されていて、まことに重要な史料になっている。

このように本書は、われわれの同時代史としてまことに貴重なものである。編著者の詳細な補足説明や史料の検討も活きていて、政治宣伝的な文書に墮することを極力避けようとしたその抑制が、本書にかえてつ光彩を与え、歴史的証言の書としてのスケールの大きさを感ぜさせずにはおかない。中嶋嶺雄(東京外大・国際関係論) サンケイ新聞出版局・各巻八八〇円